

(23) ミツバ(水耕)

主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
べと病 (<i>Plasmopara</i>)	①施設内が多湿にならないようにする。 ②培養液中に分生子が混入しないよう、隙間をなくす。 ③育苗期に子葉の裏面に霜状のかびがみられる株は使用しない。 ④発病株を早期発見して除去し、適切に処分する。 【参考事項】 発病適温は 18～23℃（夏季高温時での発生は少なく、春と秋に多い）。 感染は多湿又は葉が濡れている状態で起こる。 培養液に病原菌が侵入すると栽培槽内全体に拡がって伝染する。  ミツバべと病
根腐病 (<i>Pythium</i>)	①栽培槽やタンクに雨水などが入らないような構造にする。パイプなどのひび割れにも注意する。 ②多発時期（高温期）には培養液濃度を高くする（EC4.0 以上）。 ③前年に発病をみたら、培養液の pH を 6.0 以下で管理する。 ④培養液の液温が 25℃以上にならないように管理する。 ⑤発病株を早期発見して除去し、適切に処分する。 ⑥パネルは取り替えるか、温湯消毒（60～65℃、5～6 時間）又は蒸気消毒する。 【参考事項】 夏季高温時に発生が多い。 栽培槽、タンクを清潔にし、発生施設では栽培用容器、タンクを中性次亜塩素酸カルシウムなどで消毒する。なお、栽培槽、タンクなどの表面殺菌はできるが、パネル内部に入り込んだ根内の病原菌までは完全には殺菌できない。
株枯病 (<i>Fusarium</i>)	①種子伝染する可能性があるので、乾熱処理などの種子消毒を行う。 ②発病株を早期発見して除去し、適切に処分する。 ③パネルは取り替えるか、温湯消毒（60～65℃、5～6 時間）又は蒸気消毒する。 【参考事項】 夏季高温時に発生が多い。 栽培槽、タンクを清潔にし、発病施設では栽培用容器、タンクを中性次亜塩素酸カルシウムなどで消毒する。なお、栽培槽、タンクなどの表面殺菌はできるが、パネル内部に入り込んだ根内の病原菌までは完全には殺菌できない。
立枯病 (<i>Rhizoctonia</i>)	①種子伝染する可能性があるので、乾熱処理などの種子消毒を行う。 ②発病株を早期発見して除去し、適切に処分する。 ③培養液の液温が 25℃以上にならないように管理する。 ④パネルは取り替えるか、温湯消毒（60～65℃、5～6 時間）又は蒸気消毒する。 【参考事項】 発病適温は 25～30℃である。 本葉展開時頃から発生が見られる。 栽培槽、タンクを清潔にし、発病施設では栽培用容器、タンクを中性次亜塩素酸カルシウムなどで消毒する。なお、栽培槽、タンクなどの表面殺菌はできるが、パネル内部に入り込んだ根内の病原菌までは完全には殺菌できない。
菌核病 (<i>Sclerotinia</i>)	①発病株を早期発見して適切に処分し、菌核を残さない。 ②パネルは取り替えるか、湯湯消毒（60～65℃）又は蒸気消毒する。 【参考事項】 発病適温は 18～23℃である。 定植パネル表面に菌核が付着したり、パネル内の根を介して植物体内に病原菌が侵入する。
アブラムシ類	①ほ場周辺を除草する。 【参考事項】 ワタアブラムシ、ニンジンアブラムシ、ユキヤナギアブラムシなどが寄生する。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
ハスモンヨトウ	①ほ場周辺を除草する。 ②幼虫は発見しだい取り除く。 ③施設開口部からの侵入を防止するため、目合い4mm以下のネットを張る。 ④黄色蛍光灯を終夜点灯して防除する。 【参考事項】 加温栽培している施設内では周年発生する。アブラナ科、ナス科など多くの植物を食害し、成虫は施設外から飛来するので注意する。卵からふ化したばかりの幼虫は集団で葉を食害するため、葉は白色に透けたような被害となる。
ハダニ類	①発生源となる施設内やほ場周辺の雑草を除去する。 【参考事項】 主にカンザワハダニ、ナミハダニが寄生する。施設外から侵入するので、施設内の周辺株を中心に観察して発生に注意する。